

# 古地図から読み解く江戸湊の発展 (その1)

発表 会員 谷 弘

日本海事史学会

平成29年5月13日例会

於東京大学教養学部セミナー室

## まえがき

### 第1章 家康入府前の江戸

1. 江戸太郎重永の時代
2. 太田道灌の時代
3. 戦国時代

### 第2章 家康初期の江戸改造と水運

1. 家康が入府した頃の江戸
2. 徳川幕府の江戸町造りの始まり
3. 「別本慶長江戸図」に描かれた江戸の現代地図上への復元検討
4. 「別本慶長江戸図」の江戸の現代地図上への復元

# 古地図から読み解く江戸湊の発展（その1）

発表 会員 谷 弘

日本海事史学会

平成 29 年 5 月 13 日例会

於東京大学教養学部セミナー室

## まえがき

江戸は古くは、武蔵国豊島郡峽田領江戸の庄という小さな地名であった。そもそも江戸とは、『江』の『戸』、すなわち『川口』という意味であり、平川が日比谷湾（現在の宮城前広場や日比谷公園の辺りは海であった）にそそぐ辺りの川口の名称であった。

「江戸」とは「東京の前身」と思っている人も多いと思う。しかし、昔の江戸は現在の皇居を中心とするごく狭い範囲だったと云われており、浅草寺を中心とする浅草地域とは別に発達してきており、現在の東京とはまったく概念の異なるものである。例えば近世でも「本郷もかねやすまでは江戸の内」という川柳があるが、この『かねやす』というのは、東京大学の赤門から少し皇居に近い本郷三丁目交差点の角にある江戸時代以来の老舗の雑貨屋である。かつてはここが江戸の町のはずれであった。

天正 18 年（1590）家康が江戸に入城する。この時の江戸は、たいへん貧弱な町で、町中の家はかやぶきの家ばかり、城も石垣はなく、周囲は土塁で囲まれ、城内の建物も破損がひどく雨漏りがしていたという。この東国路の片田舎であった江戸が、家康の入府により、山を削り、海を埋立て、関東各地から巨大な石や大量の材木を集めて、50～60年の間に、世界でも類例のない百万都市に成長していく様子は、なかなかダイナミックなものである。城を築き、江戸の町を造るには、低地を埋め立て川と組み合わせた水路を建設して、物資の輸送路を確保したが、これらの土木工事に船が使われた。

また、街ができて上がった後も、増えた大人口を養っていくために、大量の輸送が必要であった。特に江戸時代は、米穀経済の時代である。幕府直轄領地は日本各地にあったし、その家臣領地も所々に点在しており、その年貢米を江戸に輸送しなければならなかった。大名も参勤交替に伴う江戸屋敷の運営や江戸城の普請役の負担のためには江戸への廻米や特産品の輸送が必要であった。

陸上交通のあまり発達していないこの頃は、この輸送が重大問題で、米のような重量物の運搬に水運の果たした役割は現在の想像以上に大きいものであった。また、日用品も関東周辺だけでは、なかなか賄えないことから、桟橋廻船や樽廻船等で、京大坂からいわゆる『下り物』と呼ばれる大量の品物が運ばれた。さらに、野菜や鮮魚、薪炭等は、利根川や江戸川、あるいは荒川（隅田川）を経由して川舟で江戸に輸送された。（これら地廻りの品物は、京大坂から来ないことから、『下らぬ物』とよばれた。）

この江戸時代の船による大量輸送のためには、湊の整備は不可欠であり、またその湊は街の発展にもなって、その有り様は千変万化しているが、必ずしも明確に解明されていない。

本稿は、今に残る古地図から、その進展ぶりを読み解くことを試みたものである。

## 第1章 家康入府前の江戸

### 1. 江戸太郎重永の時代

江戸の支配者が正史に登場するのは、鎌倉時代の歴史書である『吾妻鏡』が最初と言われている。治承 4 年（1180）、頼朝の旗揚げに味方した三浦氏への攻撃隊の中に「江戸太郎重長」の名が見える。伊豆石橋山の戦いに敗れた源頼朝が、安房国（千葉県）に落ちのび、勢力を盛返して、上総、下総を経て市川から武蔵進出を狙う。その時、前に立ちはだかったのも、江戸太郎重長である。頼朝は、太井川（現在の江戸川）・隅田川を前にして、約 10 日間下総で過ごすことになる。

当時の下総と武蔵両国の間には、徳川家康によって銚子に流路変更された広い意味での利根川が流れていた。（「利根川東遷」については、谷弘著「江戸の町造りと船」参照）このかつての広い意味での利根川は、現在残っている河川でいえば、江戸川、古利根川、中川、隅田川（入間川）である。この河川舟運を支配し、物流により富を得ていたのが、秩父平氏の江戸太郎重長である。

『義経記（第三巻・七頼朝謀反の事）』に、頼朝の「精兵三万余騎」の大軍が太井川、隅田川の両大河を渡河し、隅田宿へ至るまでのやりとりが述べられている。最初、強い抵抗を示していた江戸太郎が、その支族である豊島清光や葛西清重の説得により妥協降伏し、最終的には、一族の畠山重忠、河越重頼らと共に参陣し、渡河に協力する。しかし、最初は千葉氏の舟が使われている。

『佐殿（頼朝）仰せられけるは、「江戸太郎八箇国の大福長者と聞くに、頼朝が多勢この二三日水に堰

(せか)れて渡しかねたるに、水の渡に浮橋を組んで、頼朝が勢を武蔵国王子・板橋に著けよ」とぞのたまひける。江戸太郎うけ承りて、「首を召さるるともいかで渡すべき」と申すところに、千葉介、葛西兵衛を招きて申しけるは、「いざや江戸太郎助けん」とて、兩人が知行所、今井・栗河・亀無・うしま(牛島)と申す所より、海人の釣舟を数千艘上て、石浜と申す所は、江戸太郎が知行所なり、折節西国舟の着きたるを数千艘取寄せ、三日が内に浮橋をたたみて、江戸太郎に合力す。佐殿、神妙なる由仰せられ、さてこそ太日・墨田打越えて、板橋に著き給ひけり。』

この鎌倉に向かう源頼朝が隅田川を渡った「長井渡」のあった地点は、現在の隅田川にかかる白鬚橋南側の「橋場」と言われている(東京市史稿等)。現在の台東区橋場は、「橋場」と「石浜」が合併した場所であり、「橋場」の中に「石浜小」等がある。白鬚橋の北側は、荒川区南千住であるが、ここに石浜神社(石浜城址)があり、ピンポイントの特定は難しいが、大略白鬚橋の辺りと云うことができる。



隅田川にかかる現在の白鬚橋



石浜神社(石浜城址)

この時の渡河の様様については、ボストン美術館が所蔵する「隅田川筏渡之図」(朝桜楼国芳(歌川国芳)版元・泉市 嘉永五年(1852)頃)にも描かれているが、この絵をみると、小舟を何艘も並べて、その上に木材を置き、大きな筏を造って渡河している様子が、描かれている。



「隅田川筏渡之図」(歌川国芳)

この江戸太郎は、秩父平氏の一族で、本家の秩父(鉱物資源地)に在住する畠山氏、中流川越(農産物地)の河越氏らと共に、上述の『義経記』で頼朝が「江戸太郎八箇国の大福長者と聞く」と述べているように、荒川(下流の隅田川を含めて)の水運を支配し、勢力を養っていたといわれている。

そのため頼朝も、江戸周辺の将来支配や、荒川・隅田川と江戸湊の実務運営や物資供給のために配下に加える必要性も考慮し、仇敵三浦氏関係者も説得して、この渡河作業に当らせたものと考えられる。

この石浜周辺の土地は、浅草寺よりもさらに少し隅田川上流に当り、荒川・隅田川沿い河川舟運の終着地としての浅草湊の一部であったと考えられる。

江戸氏は、江戸時代に編纂された『新編武蔵風土記稿』によると、現在の皇居東御苑(旧江戸城本丸)の辺りに居を構えていたと推定されているが、この頃の地図は残っておらず、その館が具体的にどこに置かれていたか等の詳細は不明である。(注：平安末期の年号「長元(1028～37)」を冠した「長元江戸之図」というものがあり、幕末1853年発行の「大江戸図説集覧」にも、ほぼ同じ図が「江戸往古之図」と題して収録されているが、この図が平安時代を表す江戸図とは、一般的に信用されておらず、本論においても検討から除外した。)

当時の隅田川河口は、現在よりも浅草に近い現在より少し北側にあったが、それでも浅草とは離れており、江戸太郎が現在の皇居に近い場所に居を構えていたことを考えると、浅草湊よりも下流の河口を過ぎた所にあった江戸前島や平川流域周辺も江戸氏が支配していたと考えられる。この辺りが、古い時代の江戸湊と考えられており、西国舟が着いており、『義経記』に出てくる西国舟は、この辺りから調達されたと考えられる。なお、江戸周辺には、この浅草湊及び江戸湊の他に古川湊(渋谷川から流れて、現在の港区海岸通1丁目と芝浦1丁目の間を通る古川河口の湊で、一向集団の善福寺の拠点)や品川湊(目黒川河口の湊で、中世では航洋船の江戸湾最大の湊)もあったが、徳川時代になってこれらが統合広域化し、広義の江戸湊に発展していくこととなる。

『義経記』のいう「海人の釣舟数千艘」や「西国舟の数千艘」をそのまま信じてよいかという問題はあるが、割り引いて考えとしても、多くの舟を集められるということは、それだけ水運が発達しており、江戸氏をはじめ周辺の豪族がそれを差配していた証拠とはいえるであろう。

## 2. 太田道灌の時代

15世紀の関東の騒乱で江戸氏が没落した後の江戸の支配者として知られるのは、太田道灌である。室町時代、将軍の世継ぎ問題に端を発した争いで当時の関東管領足利成氏は、将軍から誅罰される身となり、康世元年(1455)に下総の古河に敗走する(これが古河公方)。その後、将軍勢力と古河公方勢力は、当時の利根川水系をはさんで対立するが、将軍勢力の代表が扇谷上杉氏であり、その家宰(家老)が太田道灌である。太田道灌は、父資清(すけきよ)の岩槻城及び扇谷上杉持朝の川越城の築城と呼応し、荒川・隅田川西部に拠点を置いて古河公方勢力に対抗するため品川から江戸に移って築城を開始し、長禄元年(1457)に完成した。道灌は、主筋の上杉氏に殺されるまで、約30年間江戸城に在住した。

太田道灌の城の詳しい歴史書的記録は残されていないが、江戸城内の静勝軒に掲げる詩文を、道灌の依頼を受けて、京都五山と鎌倉五山の長老クラスの僧侶が詩序と詩を書き遺している。実際に掲げられた詩板は残っていないが、その写しがあり、「群書類従」や「江戸名所図会」等に収録されている。

この詩文集に出てくる「静勝軒」は、中国の兵書『尉繚子(うつりょうし)』の「兵は静を持って勝」から名付けた望楼式の櫓建築で、後北条時代もそのまま存在しており、当時は軍事的な望楼というよりも、城主の権威を示す象徴的建物だったと考えられている。現在の場所というと、旧江戸城本丸(現皇居東御苑)の南東端富士見櫓のあるあたり(坂下門と桔梗門の間の蛤濠の北側崖上)と言われている。

現東御苑の江戸城日本丸天守台からは反対側の木立の中である。道灌は、眼下に水上交通の要衝である江戸湊を見渡せるこの絶景の地に鎌倉五山の僧侶などを集めて、よく歌会を催していた。また、東端には、「泊船亭」という建物があつたことも記録されている。

詩文集中の蕭庵(しょうあん)竜統(建仁寺禅僧)の『寄題江戸城静勝軒詩序』、暮樵得公(ぼしょうとくこう)の『左金吾源太夫江亭記』、万里集九(相国寺禅僧)の『静勝軒銘詩並序』等には、江戸城やその周辺の状況が述べられており、そこから当時の江戸城や江戸湊を推測することができる。

これら(原文は漢文)によれば、この時代の江戸城は、まだ石垣等はなく土塁であつたが、「塁の高さ十余丈」、「巨材を架して橋と為し」と述べ、一方は海に面し、一方は平川に守られた高台にあり、城や町もなかなか繁栄していたようである。もちろん、地方政権の家老職の城であり、全国制覇した江戸時代の徳川氏とは、比べるべくもないが、繁栄ぶりが忍ばれる。

また、「城の東畔に河あり。その流れ曲折して南のかた海に入る。商旅大小の風帆、漁獵来去の夜篝は、竹樹烟雲の際に隠見出没し、高橋の下に到って、纜(ともづな)を繋ぎ櫓を開き、鱗集蟻合して日々市を成せり」とある。この頃は江戸城前面に、日比谷入江という湾が深く入り込んでおり、ここへ平川が流れ込み、その東南側にあつた江戸前島周辺(現在の銀座から日本橋)には、大小の商船や漁船が群がり、江戸湊は日々市をなしていたという。この日比谷入江の「ひびや」は、海苔の養殖用の「ひび」に由来するものである。

この日比谷入江及び江戸前島の状況については、「積水天を涵(ひた)し、砂觜(し)洪潮を含吐(がんと)、もって曉夕に出縮す」、「漁家民家、沈藉(しゃ)してもって雑処す」とあり、海岸砂州をなしており、そこに漁家民家が密集していた。なお、この「高橋」は、後の「常盤橋」とする説も多くあるが、

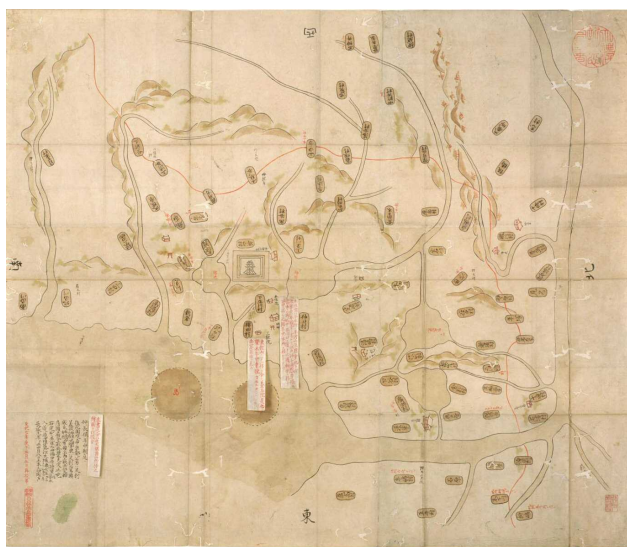
東京市史稿市街篇は、後の「大手橋」としている。これは、後述する「別本慶長江戸図」の日比谷入江の北岸に「舟役所」があり、馬場先門に当る所に「物揚場」が、日比谷入江の南岸に「町人の物揚場」もあり、和田倉に「一ノ倉地」、大手町に「二ノ倉地」、竹橋外に「三ノ倉地」があることから、江戸湊の中心は、日比谷入江にあることは、明白としている。また、「寛永江戸図」では、大手橋を「元大橋」、常盤橋を「大橋」と記していることからもういえるとしている。筆者もこの意見に賛成である。また、「天正日記」に、「はしかけ申すべきところ二百七十三あり」とし、筆頭に「本町の大橋」とあり、これが「常盤橋」であり、平川の流路変更と同時に架けられたものと考えられる。

江戸湊には、「房の米、常の茶、信の銅、越の竹箭（ちくぜん）、相の旗旌騎卒（きせいきそつ）、泉の珠屋異香（しゅさいいこう）より塩魚、漆杓（しっし）、梶茜（しせい）、筋膠（きんこう）、薬餌（やくじ）」など、多種多様な物資が集散して、盛んに貿易が行われていた情景が書かれている。

この貿易品の中にある「越の竹箭」は矢竹であろうし、「相の旗旌騎卒」とは「旗や指物を持った騎馬武者や足軽」であるから、江戸湊には、武器や戦闘員も流入していたことがわかる。これからも城に近い場所が似つかわしい。さらに、輸入品としては、宝石・香木、漆・牡麻、クチナシや茜（染料）、ニカワ、高貴薬等中国からと思われる珍品や高級品ももたらされている。

城の南方では、品川湊と江戸の間には人家が続き「東武の一都会」をなしており、北方には浅草観音堂の「巨殿宝坊」が「数十里の海に映え」そびえていた。この書物は、詩文集なので美辞麗句もあるかもしれないが、江戸城及び江戸湊を知る大きな手がかりである。

太田道灌が江戸城を築いた長禄年間（1457～1460）の江戸の様子を描いた地図といわれる長禄江戸図（別名：長禄年間江戸図）の写本がある。東京都立中央図書館が所蔵する写図（文化7年（1810）写図：彩色版）には、『江戸名所図会』編纂者の一人、斎藤幸孝（莞斎）の蔵書印が押されている。この他、国会図書館（弘化4年（1847）写図：白黒版）、東京国立博物館（徳川宗敬氏寄贈）、東大総合図書館南葵文庫及び東京都港区立郷土資料館（安永7年（1778）黒木閑斎写）に写図が残されている。



東京都立中央図書館蔵版（文化7年（1810）写）



国会図書館蔵版（弘化4年（1847）写）



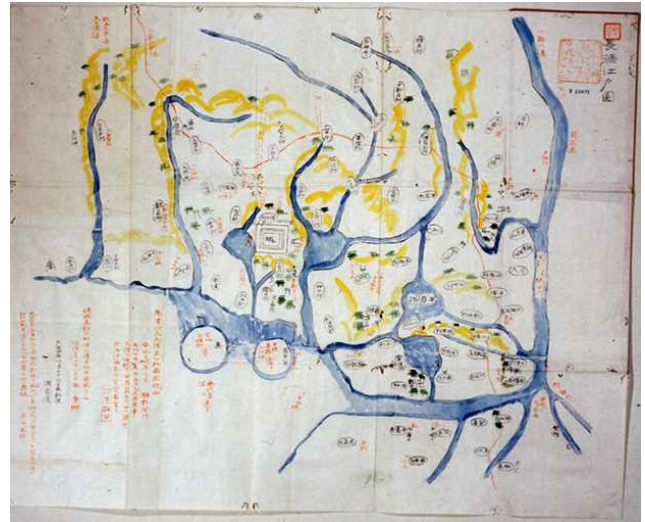
東京国立博物館（徳川宗敬氏寄贈）蔵版



東大総合図書館南葵文庫蔵版



東京都港区立郷土資料館蔵版



東大総合図書館鴉外文庫の鴉外写本

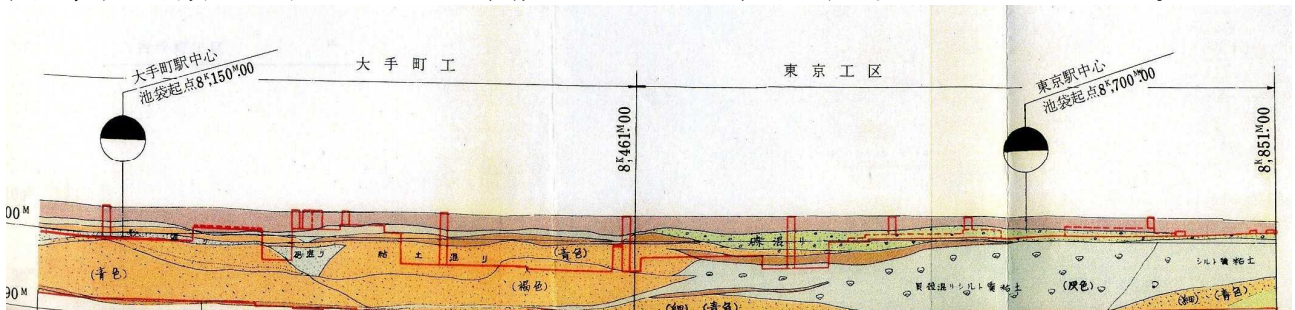
これらの長禄江戸図写は、基本的に同じで全て西が上になっており、江戸城前面は直接海に接している。これらの図には、いずれにも、徳川家康の江戸入府前にはあったとされる「江戸前島」が描かれていない。逆に慶長11年(1606)に造られた「溜池」が図中にあり、また、江戸時代前半に本図について言及した資料がないなどの点からも後世の作であるというのが、通説である。

図中の隅田川河口は、今よりはるかに上流で、江戸前島は描かれていないものの、国会図書館所蔵の写図を除き、その位置に二つの丸い地形が描かれている。国会図書館の写図は、その位置に説明文が書かれていることから、写図作成の際に省略された可能性もある。中央図書館の写図の二つの丸の部分には、「島」と書かれているが、その丸は点線で表されており、水面と明確な境界がないことを表現したものと考えられる。また、国立博物館の写図の二つの丸は、実線で描かれているものの、文字の説明は無く、芦らしい植物が描かれている。東大の写図は、海の中に白丸で描かれている。東京都港区立郷土資料館蔵版写図は、薄くギザギザの形で芦らしき植物が描かれている。

これらの地図が、後世の作としても、当時の人が長禄時代の地図として考えていたとすれば、後世の江戸前島と二つの丸い島との関係をどう考えるかが問題である。

江戸前島については、鎌倉の圓覚寺に建武2年(1335)11月8日付の「足利直義安堵状」(東京市史稿市街篇第一に写しを所載)が残っており、圓覚寺に給された領地の一覧表に「武蔵国江戸郷内前島」という記述があり、その存在は明白と考えられるので、この点には考慮を必要とする。また、「丸ノ内線建設史」は、その工事中に江戸前島に相当する場所である朝日生命ビル前で70体、東京駅中央部で50体の人骨を発掘しており、同時に発掘された板碑から室町時代のものと報告している。

さらに、東大理学部教授の鈴木尚氏は、その著書「日本人の骨」(岩波新書)で、大正12年に鍛冶橋改架工事の際に発掘された頭骨23個を解剖学・人類学の見地から梅毒痕も含めて分析し、室町時代の人骨と結論付けている。なお、近世になると江戸前島と云う名前は消えてなくなるが、これについては、徳川家康の外濠開削と低地埋め立てで、城内になったので、呼び名が変わったとされている。



大手町～東京駅間地質図(出典:帝都高速度交通営団「丸ノ内線建設史」)

上図は、帝都高速度交通営団「丸ノ内線建設史」に所載されている大手町～東京駅間のボーリングに基づく地質図である。この図を見る限り、長禄江戸図に描かれたような独立の二つの島を想定することはできず、上述の「江亭記」に描かれているように「積水天を涵(ひた)し、砂嘴(し)洪潮を含吐、もって曉夕に出縮す」、「漁家民家、沈藉(しや)してもって雑処す」とあるような海岸砂州の地に、漁家民家が密集していたものを、こういう形で表現したと考える方が妥当であろう。

太田道灌の時代から、家康の江戸入府までは、約130年であるが、この葦原が後の江戸前島になっ

たということも考えられるので、今回この周辺の地盤図を可能な限り集めてみた。ボーリング調査の代表的なものとしては、大正初期に東京都が実施したボーリング調査、関東震災後の復興局のボーリング地質調査、昭和34年に発行された東京地盤調査研究会の「東京地盤図」であるが、これらを含めて、可能な限り集めた諸資料の堆積層の傾向からは、二つの島の特徴を示すものは無く、半島のように突き出ていたと考える方が素直な解釈と思われる。

いずれにせよ、これほど城の前面が海に開けていれば、『江亭記』等に述べられた舟運のにぎわいは、容易に想像することができる。

江戸城天守閣跡から南へ、二の丸庭園の方向に下る坂を「潮見坂」といい、ここが道灌城の大手であったと言われており、まさにこの坂を下ったところに江戸湊があったのであろう。



静勝軒のあったといわれる江戸城富士見櫓



道灌城の大手であったという現在の潮見坂

### 3. 戦国時代

太田道灌は、文明18年(1486)主家である扇谷上杉定正の糟屋館(神奈川県伊勢原市)に招かれ、ここで暗殺された。道灌暗殺後江戸城は38年間、上杉氏が所有していたが、大永4年(1524)、後北条氏の北条氏綱が扇谷上杉氏を破り、その後城は、小田原北条氏の支配下にあり、北条氏滅亡後、家康が江戸に入城することとなる。

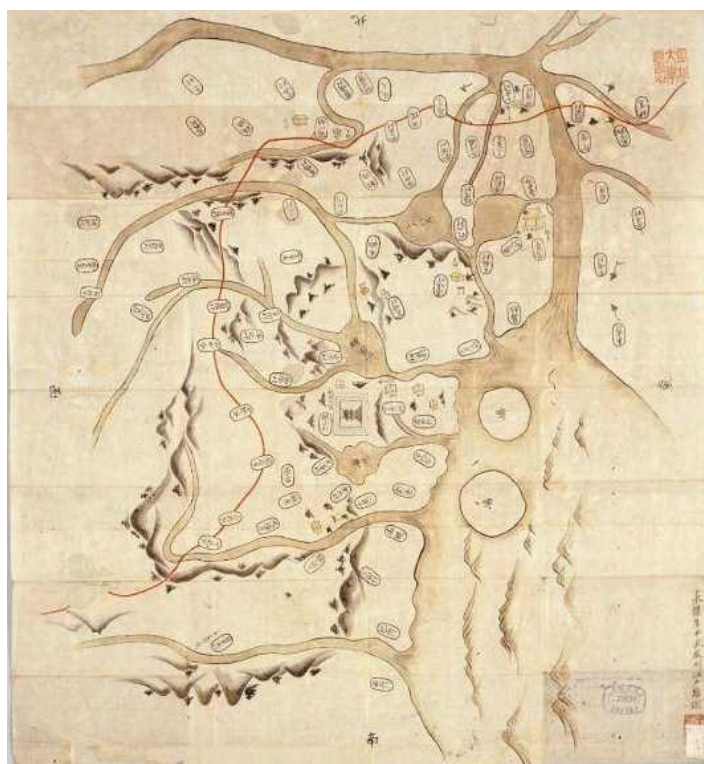
この北条氏支配の頃に相当する「永禄年中江戸図」と総称される地図として、東京国立博物館に「永禄年中武蔵国江戸絵図」と「永禄年中江戸略図」という二種類の地図が、島根大学図書館に「永禄年中江戸図」と呼ばれる地図が残っている。永禄時代(1558-69)は、足利義輝の時代である。

東京国立博物館の「永禄年中武蔵国江戸絵図」と島根大学図書館の「永禄年中江戸図」は、ほとんど同じもので、また、地図の上が北にかかっている点を除くと、地図の内容は、「長禄江戸図」ともほとんど同じで、その模写と思われる。

一方、国立博物館の「永禄年中江戸略図」は、図の上が西になっており(下図は比較のため90度左回転している)、基本的には「長禄江戸図」と同じであるが、江戸城前の島の描き方が、いかにも島らしく書かれており、また、裏に「徳川宗敬氏寄贈」とある点に注目を要する。江戸城の東にある北側の島には「今ツクダ」と、日比谷及び高輪の東にある南側の島には「今ツキヂ」と書かれているが、これが現在の「佃島」及び「築地」の位置とは、受け取れない。ただし、「今」という表現から、この地図が後世の作であることは、明白である。いずれにせよ、これらの島が後述する家康時代の江戸前島に対応するものであることは、間違いはないであろう。

上述の通り道灌の死後江戸城は、扇谷上杉氏及び後北条氏に支配されたが、時は戦い続きの戦国時代であり、両氏の本拠は、それぞれ現在の伊勢原市及び小田原市で、江戸城は両氏の単なる出城の一つになってしまった。それでも扇谷上杉氏の時代は、鎌倉が関東地方の中心であり、江戸もまだ物流の役割があったが、後北条氏の時代になると中心が小田原に移り、物流も小田原に直結するものになったであろう。このため、江戸の経済的地位は一層低下し、徳川家康の時代までは、寒村の時代が続くこととなる。後北条氏は、江戸周辺の検知を行い、「小田原衆所領役帳」を作成しているが、これはあくまで家臣の所領管理帳であり、江戸湊については触れられておらず、他にも資料は残されていない。これは、道灌当時のような江戸湊の繁栄は無く寂れてしまったことを意味しており、その結果、城や周辺状況の

情報も希薄になり、道灌と家康をつなぐ約100年間の情報不足の原因にもなっている。



島根大学図書館蔵「永禄年中江戸図」



国立博物館蔵「永禄年中江戸略図」(90度左回転)

## 第2章 家康初期の江戸改造と水運

### 1. 家康が入府した頃の江戸

戦国時代の長い戦いの中で、小田原城で最後までがんばっていた関東地方の最後の戦国大名北条氏が豊臣秀吉へ降伏したことにより、伊豆、相模、武蔵、上総、下総、上野の関東六ヶ国は徳川家康の領国となった。天正18年(1590)7月のことであり、この年8月1日家康は正式に江戸城に入った。太田道灌の築城から数えて134年、北条氏綱の入城から66年後のことである。

関東六ヶ国の領主となる徳川氏の新しい居城は、常識的な考えからすれば、それまで関東一円の雄であった北条氏の拠点の小田原、あるいは鎌倉幕府のあった鎌倉を拠点とするのが普通であったであろう。かつては大田道灌の居城といっても、室町幕府の鎌倉出先機関「関東管領」の執事であった上杉氏のさらに家老職の者の城であり、天下をねらう家康の居城としては、規模が違うであろう。

かつ、道灌の時代と比べると、当時はそれも衰退し、小田原北条氏の出城となり、荒れ果てて周りは一面の芦原となってしまうていた江戸を、徳川氏の居城に定めるという決断はたいへんなものであったであろう。豊臣秀吉の勧めに従ったとはいうものの、あるいはそれ故に、徳川家の家臣にとっては、心穏やかなものではなかったであろう。徳川家では、この入府を「江戸御打ち入り」といい、この8月1日を「八朔(はっさく)」と称して、江戸幕府にとっては五節句に匹敵する祝日としていることから、その決意の程をうかがい知ることができる。

徳川家康が江戸に入府した頃の江戸の状況について、『岩淵夜話別集』という書物には、次のように書かれている。「武州江戸を御居城と仰せ出されるに付き、諸人手を打ってこれはいかにと驚く子細は、その時代までは、東の方の平地の分はここもかしこも汐入りの蘆原にて、町屋侍屋敷を十町と割り付べき様もなく、さてまた西南の方はひょうひょうと萱原武蔵野へと続き、どこをしまりというべき様もなし。(中略)大田道灌初めて縄を張り取立て、その後北条家の遠山が居住せしまでなれば、城も小さく、堀の幅も狭く、門塀の體までなかなか浅間なる様子なれば、関八州の大守の御座城となさるべき様體には、人々存じ寄らざるも道理なり。」とある。現在の東京下町の大部分は、遠浅の入り江か、海辺の葦の茂った湿地帯で、家康入府後、これが埋め立てられて形作られたものである。現在の日本橋から有楽町方面にかけては、中世に「江戸前島」と呼ばれた古い台地があったが、それらは海面すれすれの低いものであり、海岸砂州のような状況であった。また、日比谷から大手方面にかけては、浅い入り江

が袋状に奥深く入り込んで、江戸城の下まで達していた。

家康の業績を大きく見せるため、江戸入府の頃を粗末に書いたという意見もあるが、この文章を読むかぎり、上述した長祿江戸図や永祿江戸図に描かれたほどでなくとも、江戸城の周りには、葦の生えた多くの湿地帯があり、荒れ果てた地の情景が彷彿として浮んでくるとともに、徳川家の家臣自身が、何でもこのような片田舎の地に城を構えるのかと驚いている様子がよく分る。

また『新安手簡』という書物には、「唯今は桜田大手門と申すを、五六十年前までは泊船門と申しき。是は開国のはじめまで、今のヒビヤ門のほとりよりして、かの西南の大手までも船入の入江にて、船をも今の西丸下の屋敷近辺に泊め申し候故、ヤヨスカシ杯（などと）申す名も、遺（のこ）り候。」と書いている。上述したように、当時は城の近くの日比谷門の辺りに船着場があり、船も出入りしていたことがわかる。なお、この「ヤヨスカシ」とは、幕府の海事顧問となったオランダ人ヤン・ヨーステンの名にちなんだ河岸で、現在の東京駅の八重洲口がこの地名を引き継いでいる。

『落穂集』にも、「只今外桜田御門立て候所には、大きな扉なしの木戸立て、是有り。名をば小田原御門と申し候。只今のやよすかしの辺には獵（漁）師共の家居これ有り、肴などかい求め候節は、右の獵師共方にて相調へ申たる事に候。御入国の翌年あたりの事かと覚へ申候。長雨の以後、大南風の吹き候よしこれ有り、その節高汐揚げ、件の獵師町へ水つき候故、獵師共、船に妻子を乗せ、家財を取って、只今馬場先御門になり候辺りの畑中に有り候大木共に船をつなぎ、食事などを調へ罷在候を、御城へ御番に上り候とて、見かけし由。」とある。江戸前島には漁師が住んでおり、その漁師から魚を買ったり、台風の際には、漁師が御城近くに避難してきたりする等、和やかな風景が見られたことが述べられている。さらに、「関東御入国の節只今の西の丸の所は野山にて、所々に田畑などもこれ有り、春は桃桜梅躑躅などの花も咲き、江戸中に於て貴賤の遊山所にいたし、天地庵と申し常念仏堂等もこれ有り候なり。」現在、皇居になっている西の丸も当時は城外で、田畑になっており、桃や、桜や、梅、つつじの花が咲乱れる町人の憩いの場所であったようである。

このように、家康が入府した天正18年頃の江戸は、広大な武蔵野のわずかな一角を占める小さな寒村であったと言われており、江戸城も、今の皇居東御苑に当たる旧本丸と二の丸の区域であり、現在の皇居宮殿のある西の丸は城外で、城の構えも小さかった。

しかし、その江戸選択は、秀吉の指示に寄るものだけではなく、家康なりの評価と確信もあったのではないかと、筆者は考えている。松井松平家の家臣石川正西が万治3年(1660)に書き上げて藩主に献上した『聞見集』という記録（埼玉県史料集第1集）には、次のように述べられている。「其比は江戸は遠山居城にて、いかにも龜相(そそう)、町屋などもかやふきの家百計もあるかなしかの体、城もかたち計にて城のやうにも無之、あさましきをきとくに秀吉公御見立被成候とて、諸人かんし申候、昔の例ならは、かまくら御さしつ可被成事也、又は小田原可然と可被仰御事也と、皆申つる、右両所はふな入りもなく、江戸にはおとりたる所なり、江戸は年々に万事さかへまし、秀吉公の御目聞(めきき)申も、おろかにて御座候」最初の江戸は、茅葺きの町家がわずかに100軒ほどしかないひどいところで、あちこちに低湿地帯もあったが、江戸は、東海道、甲州道中及び奥州道中の主要陸路の交わる所であり、小田原や鎌倉と違い江戸湾最奥部にあり、波静かな舟を入れるすぐれた海湊もあり、毎年栄えていくのを見ると、ここを選んだことが間違いでなかったことを評価している。

## 2. 徳川幕府の江戸町造りの始まり

### (1) 徳川幕府の江戸町造り

既に述べた通り、家康が入城した当初の江戸城は、太田道灌の築城した小規模な城であり、かつ、小田原北条氏の支城となり、築城から時を経て荒廃が進んでいた。このため、江戸に入府するやいなや、各種の町造り、城造りの活動を開始した。しかし、城の周辺にわずかな町屋が散在する程度であった江戸の町を日本の首都となし、人口が100万人を越える世界有数の大都市する町造りは、それほど簡単なものではなく、260年にわたる治世の間、永い年月をかけて営々と続けられてできたものである。

江戸の町造りは、大きく分けて次の四つに区分できるであろう。

- ①草創期—家康の入府から徳川幕府開幕までの独自開発の時期(1590～1603)
- ②開幕発展期—徳川幕府開幕による天下普請開始から明暦の大火まで(1603～1657)、江戸を日本の首都とするための拡大工事の進められた時代である。
- ③拡大期—明暦の大火から将軍吉宗の時代まで(1657～1745)、大火後、武家屋敷の移転など江戸市街の改造に着手、これに伴い江戸の範囲が本所、深川地区に広がっていく。
- ④晩期—将軍吉宗の死後から幕末まで(1745～1868)、江戸文化は爛熟の度を加え、幕末に向かっていく。人口も文化文政の頃をピークに減少していく。

今回は、①の「草創期」を取り上げた。この時期は、まだ豊臣政権の大名としての徳川家の本拠地を創造するための改築であり、関ヶ原の戦いにより家康が政権を掌握し、全国の大名に手伝わせて行う天下普請とは、その意味合いが異なっている。

## （２）最初の江戸水路「道三堀」の開通

天正18年(1590)徳川家康は、江戸城に入城するや、旧領地から家臣を移し、麴町、番町、飯田町から神保町に及ぶ一帯と、その西北の四谷、牛込台地上に家臣の居宅を建設した。次いで、江戸城の修復より先にまず着手したのが、道三堀と呼ばれる舟入堀の開削である。この堀は、現在よりも少し上流にあった隅田川河口にも近い平川河口と江戸城の和田倉を結ぶものである（現在の呉服橋から大手町に至る道路の北沿い）。これにより、江戸城から道三堀を通り、平川（後の日本橋川）を経由して隅田川につながる水路が開かれた。この堀の長さは約1km、幅は約25m程度あったと言われている。

入国後最初のこの工事について、『落穂集』には、「ある人問いて言う、御入国以後、町方普請の義は、いづれの所より初めて仰付けられ候と聞き及ばれ候哉。答えて曰く、（中略）唯今の日本橋筋より道三河岸通りの堅堀のほられ候が初りにて候。夫から段々と堅堀横堀出来、その揚げ土をば堀端に山野ごとく積み上げ之有り候を、諸国より参り集り候町人共願い出候へば町屋を割り下され候に付、勝手次第に右の揚げ土を引取地形を築立、屋敷取を仕り…」と書かれている。

この文書にもある通り、道三堀の開掘と平行して、いくつもの縦堀、横堀が掘られ、その掘り上げた土を町人に自由に使わせ、浅瀬を埋立て、町並を作らせた。これが道三堀沿いの常盤橋から浅草橋にかけての区画整理、すなわち「本町の町割」又は「天正の町割」と言われているものである。これにより道三堀沿いには、材木町、舟町、四日市町、柳町などが開かれた。なお、この道三堀という名前は、当時、この堀の河岸に幕府御用医師曲直瀬（まなせ）道三玄朔(1549～1631)の屋敷があったことによる。

この堀の完成によって、土木建築資材や蔵米等の舟積された諸物資が隅田川から直接江戸城にまで入るようになり、隅田川河口の入り江から江戸前島に沿って日比谷入り江までに散在していた江戸湊がこの水路で直結され、さらには、後述する小名木川の開削等とも相まって、江戸湊全体の発展につながっていった。残念ながら、この水路は明治43年(1909)に埋め立てられてしまっている。



新大手町ビルと野村ビルの間にある道三堀跡碑



古地図上の道三堀

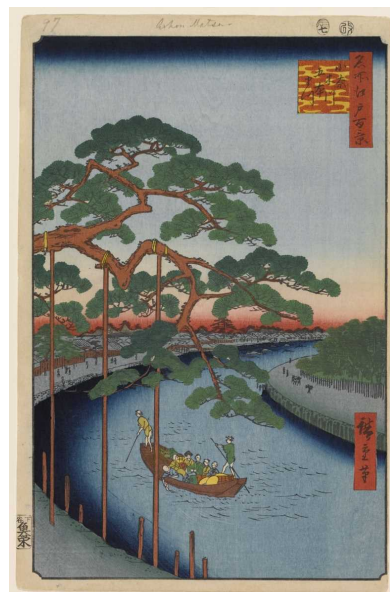
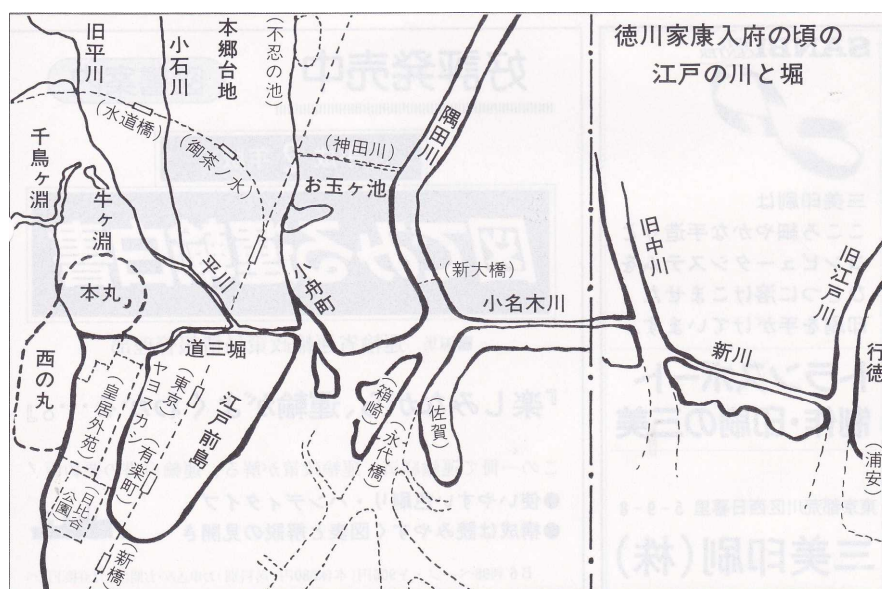
## （３）行徳へ続く「小名木川」の開通

道三堀に続く運河として、隅田川下流部から旧中川に至る小名木川が設計された。この運河は、さらに旧中川（古利根川）から新川で江戸川（利根川）と結び、江戸と当時塩の大生産地であった千葉県行徳との間に直接の舟運を開くことを意図したものであった。塩は武田信玄の故事を待つまでもなく、重要な軍需物資であり、徳川家康が、最初に手掛けたのも当然である。開通した年は、正確にはわからないが、既に慶長年間(1596～1615)には開削されていたといわれている。

また、この運河は、遠浅であった江戸湾内の海岸線を掘ったものであり、海岸線の確定工事としての性格も持っていた。航海技術の幼稚なこの時代においては、外海航海は天候が悪いと困難を伴うが、運河であれば天候に左右されずに安定的な輸送が確保できることも、この運河を掘った理由である。（下図参照）運河の長さはおよそ一里十町、川幅は二十間（約40m）であった。

江戸初期の『参考落穂集』という書物は、「南川（氏名）語りて曰く、神君（家康）天正18年御入国あそばされ候と、不日に（日ならずして）行徳の鹽路浜へ、船路通路早速仰付けられ、堀通し申すべ

き旨仰付けられ、たちまち船路出来いたし候」（（ ）内は筆者注）とし、小名木川建設の様子を詳しく述べている。なお、小名木川という名は、この運河の開削工事に当たった小名木四郎兵衛に因んだものである。将来、この小名木川は、江戸と東遷後の利根川、鬼怒川等とも結ぶ水上交通の大動脈となっていく。また、小名木川に続いて、中川より江戸川に達する水路は、もともと小流であったものを新しく開削したので、新川と呼ばれている。



徳川家康入府の頃の江戸の川（出典：谷弘著「江戸の町造りと船」） 名所江戸百景「小奈木川五本松」

#### （４）江戸城の整備

徳川家康が入城した頃の江戸城は、太田道灌が築城した際の比較的小規模な城のままであり、現在の本丸、二の丸の範囲が城域であった。そこで徳川家康は開幕前に、それまでの本丸（元は二つの郭であったものを一つの郭にした）と二の丸に加え、西の丸・三の丸・吹上・北の丸を増築している。

文禄元年(1592)に、徳川家康は、譜代の臣に課役を命じ、江戸城の西の丸の築城工事を開始した。上述の道三堀開削や平川の江戸前島中央部への移設に伴う残土や、西の丸に整備した堀からかき揚げた土砂をもって、日比谷入江の一部を埋立て、現在の西の丸下の半分以上の造成を行い、同時に街造りも行っている。この工事は、千鳥ヶ淵及び牛ヶ淵にダムを築いて上水水源を確保するとともに、家康の将来の隠居城としての西の丸(現皇居)を整備したものである。この工事により、日比谷入江に方37余町に及ぶ築地ができ、そこを武家屋敷とした。

天正18年(1580)8月に家康とともに甲州街道を行進して江戸城に入った第一陣の軍勢だけでも約8000人と言われており、当時の江戸の収容力をはるかに超えており、その後の後続部隊や町民の移住も考えると、住居の確保は切実なものがあったと考えられる。

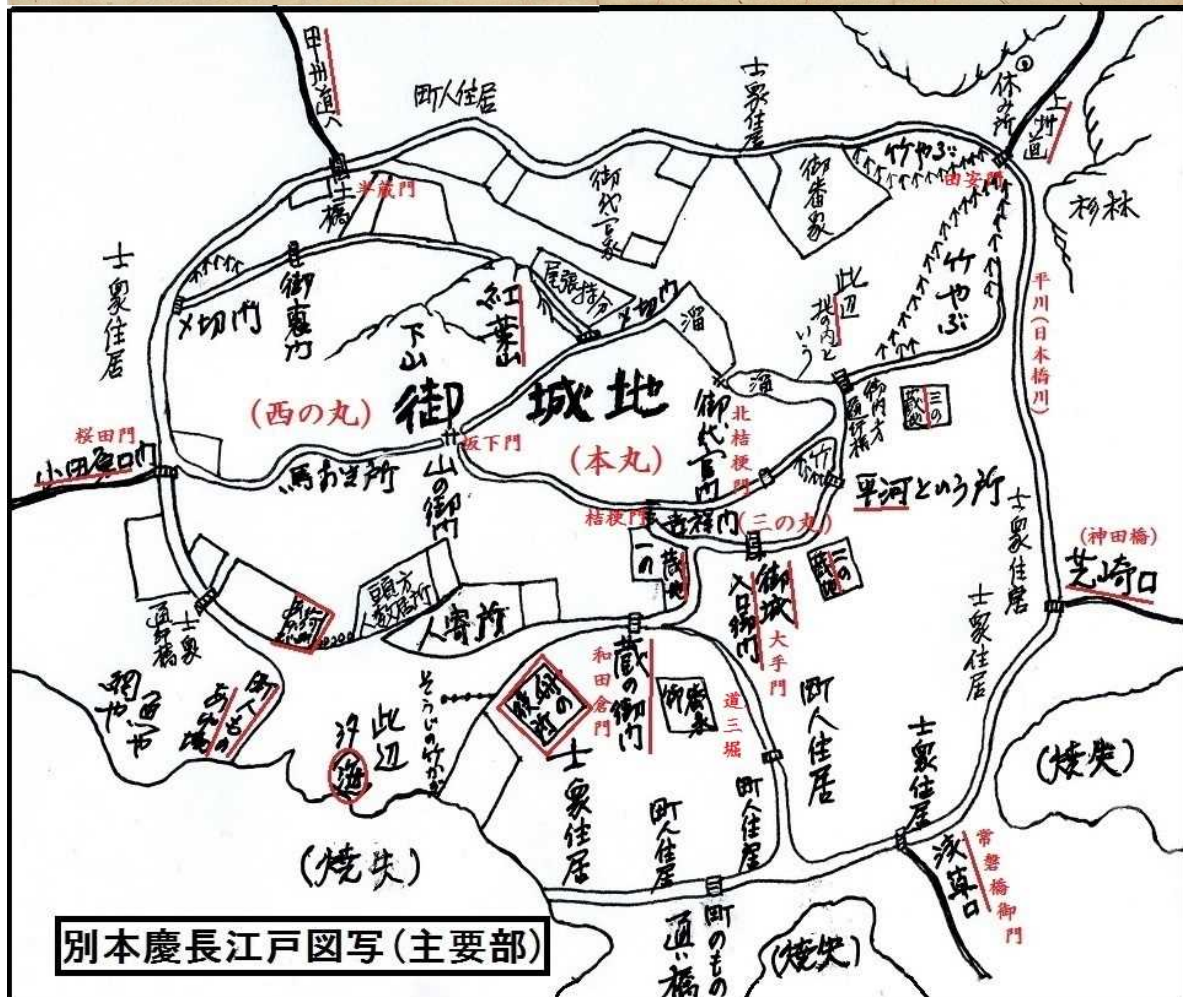
この他、文禄3年(1594)には、隅田川に千住大橋を架け、慶長5年(1600)に多摩川に六郷橋を渡して、翌年には、東海道を武蔵野台地から芝筋に移して、日本橋を城下町の中心とした。しかし、これらの工事は秀吉の在世中のもので、朝鮮出兵のこともあって、慶長8年(1603)の開幕以降に行われる天下普請による江戸城拡張工事と比べると、まだ細々としたものであった。

この徳川幕府の天下普請以前の状況が、後述する『別本慶長江戸図』に表されている。この地図では、平川の下流に江戸城と隅田川をつなぐ道三堀が掘られており、日比谷入り江も一部は埋め立てられているものの、その大部分は残っている。しかし、江戸城近くには、舟の役所が設けられ、物揚げ場や蔵が整備されており、江戸湊が大きく発展していることが見て取れる。

### 3. 「別本慶長江戸図」に描かれた江戸の現代地図上への復元検討

#### （１）「別本慶長江戸図」とは

江戸時代初期の正確な江戸の地図としては、わずかに『慶長江戸図』（通称「別本慶長江戸図」、「慶長七年江戸図」）といわれるものの写しが東京中央図書館等に残っているのみである。この図も原図は残されておらず写しであるが、素朴なスケッチ風の図ではあものの、信頼できる最初の江戸図とされており、今では江戸初期の状況を知る数少ない貴重な資料となっている。



筆者の中心部模写(一部簡略化)

地図中の人名と、日比谷入江が慶長8年（1603）には埋め立てられていることなどから、**慶長7年（1602）頃の江戸の町並みを記したもの**と推定されている。本図は左上部に「此図弘化二巳年九月、山下友右衛門之所蔵せしを借得てうつしおくもの也（以下略）」という説明があるように、弘化2年（1845）の写図である。写した元の絵図は、下部が焼失しており、その部分は朱書きで「焼失シテ不分」とある。

描かれている範囲は「御城」を中心に内濠周辺までで、城の門は現在の門の位置とほぼ一致している。左側下方の陸地に海が入り込んだ部分は、現在の皇居前広場から新橋駅あたりと考えられている。

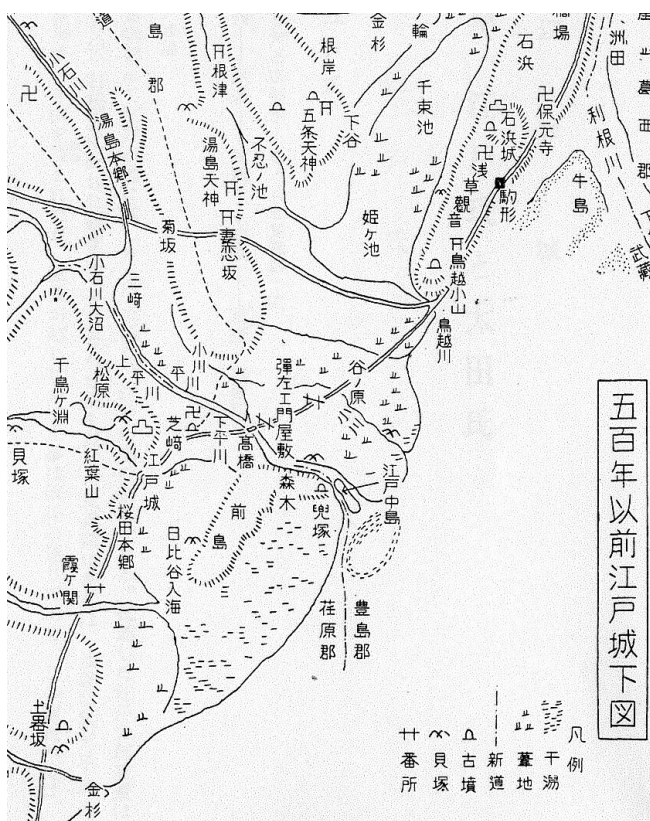
この地図や当時の文献を見ると、この頃は、現在の皇居前広場や日比谷公園の辺りは海で、日比谷から大手門にかけては浅い入江が江戸城の近くまで入りこんでいた。その海岸線は、西岸は大手門から日比谷、霞ヶ関、田町へ、東岸は大手町から東京駅、新橋へと連なり、平川に沿って上平川村、下平川村等の小さな村があった。また、当時は江戸前島と呼ばれていた現在の日本橋、京橋、銀座から築地にかけての一带は、海面とすれすれの砂洲で、漁師を中心としたわずかの民家があったと言われている。

城の背後には、麴町台地、牛込台地、神田台地、小石川台地等が波を打ったように並び、その東の方には、雨水を集めた不忍池、姫ヶ池、千束池等が、西の方には、湧水によってできた池があった。このように、当時の江戸は起伏の多い沼と萱原の混じった荒涼とした地であったようである。

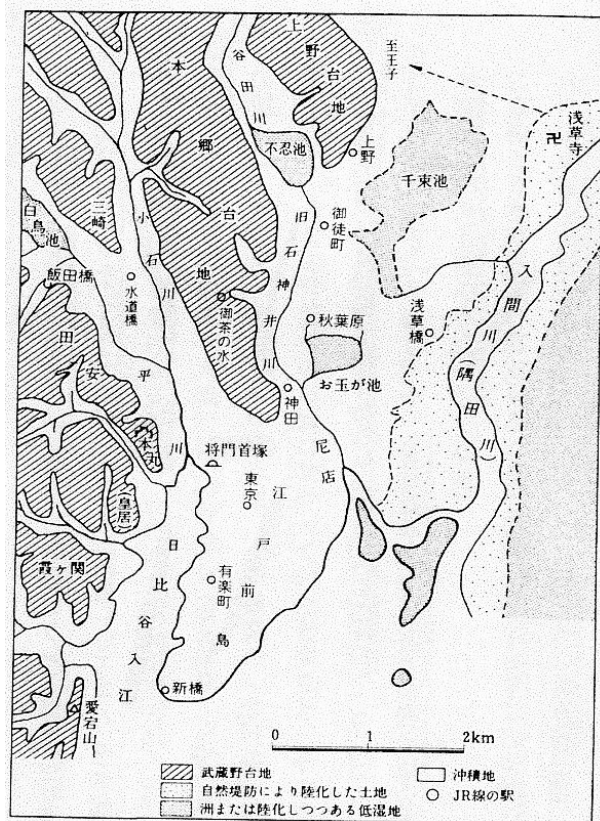
## （2）昔の平川（後の日本橋川）はどう流れていたか

この時代の江戸の姿を復元する作業は、多くの人によってなされている。その代表が、下図の菊池山哉氏の想定図と、鈴木理生氏の想定図である。その最大の対立点は、平川がどこを流れていたかということと、それとの関連で日比谷入江の東側にあった江戸前島をどう想定するかということである。

平川は、飯田橋から江戸城北方を流れていた川で、後に日本橋川と呼ばれるようになった川で、外濠の一部になったことから、外濠川とも呼ばれた。この川の流路については、昔から諸説あり、元々から江戸前島の根元を流れて江戸前島東方で江戸湾に注いでいたという説（菊池山哉等）と、元々は、日比谷入江に注いでいたものを人工的に掘削し、日本橋を経由して、江戸前島東方に流すようにしたという説（鈴木理生等）に分れていた。明治44年発行の東京市史稿は、その河口を大手門前付近としている。しかし、大正初期に東京都が実施したボーリング調査を基に江戸前島の根元を流れて江戸前島東方で海に注いでいたという菊池説が定説化していたが、最近のボーリング資料の増加により、一転して日比谷入江への流入説が有力になってきている。古い江戸を復元するためには、この平川の問題を解決しなければならない。



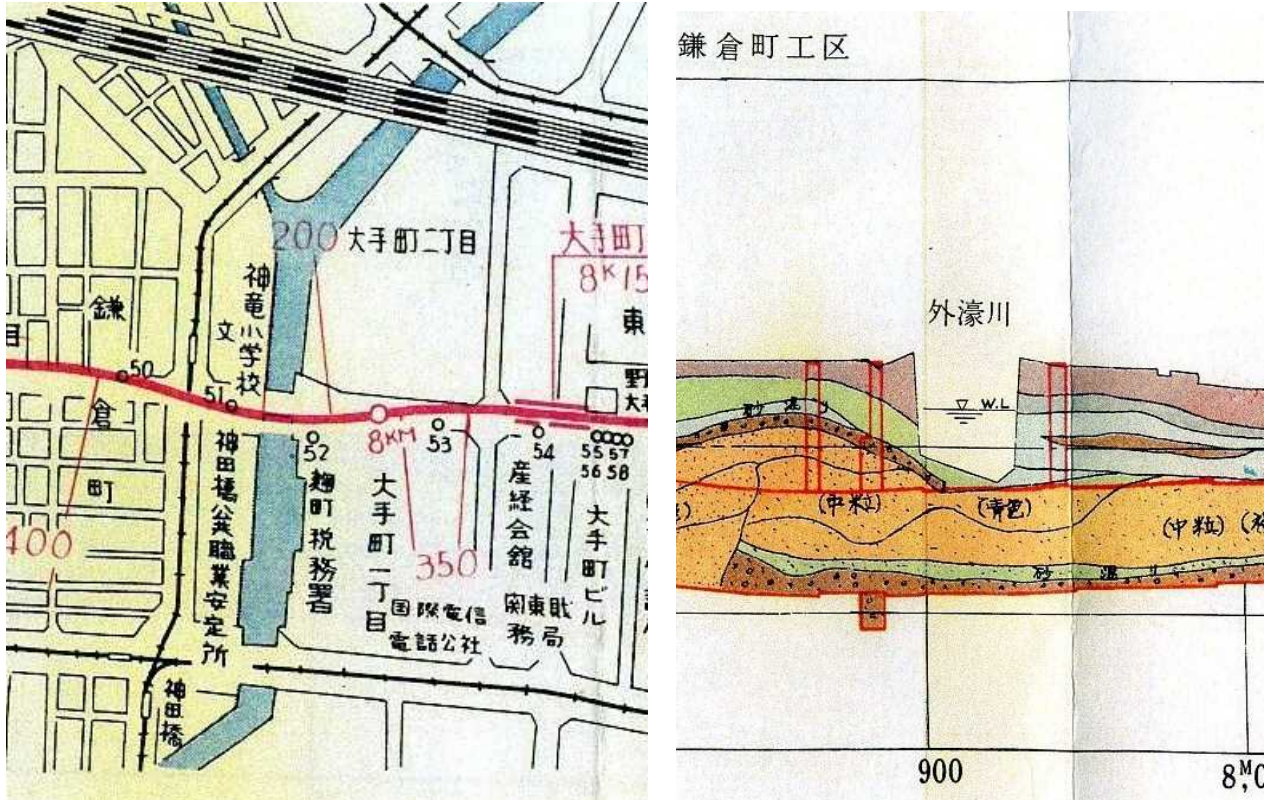
菊池山哉氏の想定した平川流路



鈴木理生氏の想定した元々の平川流路

### (3) 昔の平川（後の日本橋川）は天然河川か人工河川か

下図は、帝都高速度交通営団が「丸ノ内線建設」のために行ったボーリング調査をまとめた資料に含まれている日本橋川（外濠川）の断面図である。この図を見ると、昔の平川（外濠川、日本橋川）は、人工的に掘削された水路であるということが、明白である。



上2図は日本橋川（旧平川）の位置とボーリング地質図（出典：営団「丸ノ内線建設史」）

平川の流路変更が何時行われたかに関して、鈴木理生氏は、その著書「江戸と江戸城」（1975）においては、「太田道灌時代と推定する」とし、江戸前島の所有者である鎌倉円覚寺の勢力圏との境界画定と江戸湊と浅草湊の連携を上げていた。しかし、その後発行された「幻の江戸百年」（1991）では、家康の江戸入府直後の工事の際で、日比谷入江の埋め立てを前提として、付け替えたとしている。

岡野友彦氏は、江戸遺跡研究会編「江戸の開府と土木技術」において、「徳川家康の江戸入り直後のこと」とし、日比谷入江の埋め立てを前提として、平川が入江に流入することを止める必要があったためとしている。江戸東京博物館の展示も、開削は家康の江戸入国のところに含まれているが、詳しい説明はない。



千代田区役所東側では日本橋川と清水濠間は数十m



想定される旧平河河口

上述の通り、徳川家康は、江戸に入国して時をおかず、江戸城の修復より先に、先ず道三堀の開削を行い、次いで行徳塩の輸送のため、小名木川を開削し、隅田川河口と江戸城の和田倉を結ぶ工事を行っている。筆者は、これらの江戸城東部整備のための一連の作業の中で、平川の流路も付け替えられたと考えている。流路の変更に当っては、当然将来計画として日比谷入江の埋め立ても念頭にあり、それを考慮に入れていたことは間違いないであろう。しかし、筆者は、日比谷入江の埋め立てに10年も先だって、入府直後の財政的にも人員的にも厳しい時期に実施したのは、それなりの理由があると考えている。それは、これらの工事により、江戸城から道三堀を通り、平川（日本橋川）を經由して隅田川につながる水路が開かれたが、道三堀の舟の運航のためには、水路の水量確保が重要な要素であり、そのために、その途中に平川を接続する工事（低水工事）が必要であったのではないかと考えている。

その他のこの頃の工事としては、入府2年後の文禄元年(1592)に、譜代の臣の課役により、江戸城西の丸の築城工事を開始し、その堀からのかき揚げ土砂を使って、日比谷入江の一部を埋立て、土地を確保し、ここに武家屋敷を造っている。

#### （４）三つの汐見坂

一番有名な「汐見坂」は、上述の皇居東御苑のものである。大手門から二の丸公園を通り白鳥壕の方に出ると汐見坂で、急な坂を登ると目の前に天守台が見えてくる本丸跡である。しかし、天守閣は明暦の大火(1657)で焼け落ちた後再建されず、今にいたるまで石の天守台のみが残っている。徳川時代は本丸と二の丸をつなぐ坂道であったが、この坂からは、日比谷入り江の海が手にとるように眺められたことから、「汐見坂」の名が起ったと言われている。かなり急な坂で息が切れるが、下に海があればよい眺めであろうと思う。

地下鉄霞ヶ関の駅を降りて、外務省と財務省の間を国会の方に登る坂を「潮見坂」という。坂の途中の植込みの中には、歴史的な由来を説明した碑も立てられている。

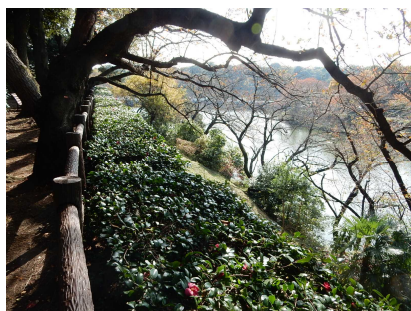
また、『御府内備考』には、『江戸紀聞』という本を引用し、潮見坂について、「松平周防守、松平筑前守の屋敷の間にある坂をいう。」と書かれているが、『江戸切絵図』で見ると、この「潮見坂」は、ホテルオオクラの北側を通して米国大使館の前へ降りてくる坂のことである。現地に行ってみると、米国大使館の門の横に「潮見坂」である旨の碑板が立てられている。

このようにこの辺りに多くの「汐見坂」があるのは、まさに日比谷入江が江戸城大手門の前まで入込でいたなごりである。

#### （５）「別本慶長江戸図」に描かれた地名の現在地名への比定

地図中で、現在でもそのまま使われている地名は、「紅葉山」、「北の内(丸)」及び「平川」である。この平川については、説明書きはないものの、橋が架かっており、ここが現在の「平川門」である。

城内の門については、「御城入口御門」は、現在の「大手門」で、門を入った先の現在の百人番所辺りにあったといわれており、旧江戸城の正門であった。ここから江戸城内の三の丸に入る。そして、現在の中の門跡を經由してか、又は汐見坂を通して本丸に至る。中の門の西には、「吉祥門(現桔梗門)」がある。この名は、道灌の桔梗紋から来ており、大田道灌時代の泊船亭はこの辺りにあったといわれている。本丸北奥の「御代官門」は、現在の「北桔梗門」である。ここは、本丸へ北から入る門になっていた。本丸と西の丸の間にある「山の御門」は、後の「坂下門」の位置に当たり、西ノ丸御殿の坂下にあることで坂下門と名付けられた。西の丸西側の壕にかかる「土橋」が現在の「半蔵門」で、ここを中に入ったところが「御裏門」であった。「半蔵門」は、伊賀忍者で有名な服部半蔵の組屋敷があったところで、将軍に緊急事態が発生した場合に甲州街道へ脱出する門であった。



北の丸の千鳥ヶ淵沿いは高台



大手門（御城入口御門）



桔梗門（吉祥門）



北桔梗門（御代官門）



坂下門（山の御門）



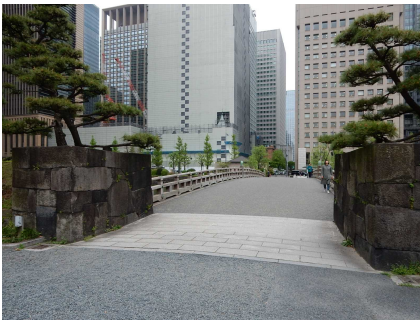
半蔵門（土橋）

本丸東側の「蔵の御門」は、後の「和田倉御門」で、現在の和田倉噴水地区に当たる。江戸時代以前は漁業が盛んな東京湾の入江に面しており、江戸時代の初期にこの周辺が埋め立てられ、江戸城へ生活物資を運ぶための荷揚げ場や倉庫「一ノ蔵地」が置かれ、道三堀を利用した海上輸送の拠点になっていた。すぐ近くに「舟の役所」が置かれ、まさに江戸湊そのものであった。なお、「二の蔵地」は大手町に、「三の蔵地」は、竹橋外に置かれていた。

城内の壕にかかる橋については、「御内方通行橋」は、現在の「竹橋御門跡」である。

壕から城外への通行口については、「芝崎口」は、寛永図の「大炊殿（おおいどの）橋」で現在の「神田橋」、「浅草口」は後の「常磐橋御門」で、古くは浅草口、追手口といわれており、大手口門に続く外濠の正門であった。「小田原口門」は、現在の「桜田門」で、当初はここが小田原街道の始点となっていたことから、小田原口と呼ばれていた。「上州道」と書かれている所は、現在の「田安門」である。

この小田原口門から水路が海に出たところの左上に「荷物あげバ」及び右下に「町人ものあげ所」があり、ここが江戸湊の荷揚げ場で、現在の「馬場先門」辺りと考えられる。



和田倉橋（蔵の御門）左手から道三堀



桜田門（小田原口門）



北の丸田安門（上州道）

#### 4. 「別本慶長江戸図」の江戸の現代地図上への復元

##### （1）地質図から見た「日比谷入江」と「江戸前島」

江戸前島や日比谷入江は、縄文海進で進出した海が、その後海退したことに伴い形成されたものである。例えば、江戸前島のあった東京駅周辺でみると、標高マイナス2m辺りに洪積層(200万年～1万年前に堆積した古い地層)があり、その上に沖積層(ちゅうせきそう：約1万年前以降に堆積した新しい地層)が堆積して、水面上の微高地を形成しており、その上に近世から近代に至る間の盛土が載っている。

関東大震災後、内務省復興局建設部は、復興のために多くのボーリング調査を行い、昭和4年(1929)に「東京及横浜地質調査報告書」をまとめ、地下の地質構造を明らかにしている。また、昭和34年(1959)には、東京都地質調査会が建設省建築研究所及び東京都建築局の監修のもとにボーリングデータを取りまとめて「東京地盤図」を発行している。さらに、帝都高速度交通営団も、丸ノ内線、日比谷線、千代田線及び有楽町線の建設に当たって作成した地質関係図をその建設史の中で発表している。

明治期に作成された参謀本部陸軍部測量局の作成した測量地図にも、細かく高低差が描かれており、後世の埋め立て要素の考慮は必要なものの、地形を推定するのに大変参考になる。

江戸城東部の日比谷入江及び隅田川河口部の埋め立は、徳川家康が江戸入府した天正18年(1590)以降とされている。(遠藤毅著「東京都臨海域における埋立地造成の歴史」)そのため、上記のボーリング資料から得られた地質図を参考にして、家康が入府する前の「日比谷入江」と「江戸前島」の状況を検討した。これらを参考にして、描いたのが下図のオレンジの線である。これが、家康が築城工事にかかる前の海岸線と考えている。地形の確認のため、皇居東御苑、北の丸公園、皇居外周、日本橋川には、何回も足を運び、最終的には、皇居参観ツアーにも参加して、地形の判断に間違いがないか確認した。

## (2) 「別本慶長江戸図」の江戸の現代地図上への復元

次いで、上述の第2項及び第3項で検討した内容をベースにして「別本慶長江戸図」に描かれた江戸を現代地図上へ復元したのが、下図である。可能な限り資料を集め、先学の著作も読んで検討を行ったが、なお、完全というには、おこがましい気持ちもある。今後さらに検討を加え、完璧を期したいと考えている。

諸賢のご叱責とご教示をお願いする次第である。

